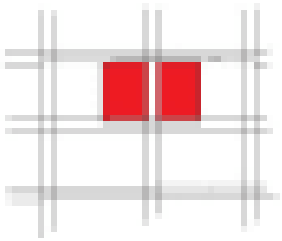
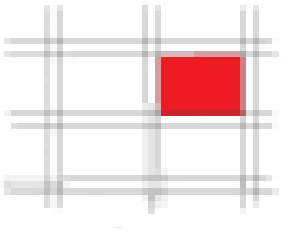
（1）大聖寺の町っていつ頃できたのでしょうか？

皆さん、大聖寺の城下町って、いつ頃できたかご存じですか？その成立時期についてははっきりしないようですが、少なくとも前田家が支配するようになる前であったことは確かだそうです。そして、その根拠を大聖寺町の町割りから探ることができるそうです。城下町の町づくりは、織田信長・豊臣秀吉の時代までと徳川家康の時代以降では違いがあります。



信長・秀吉のころ



家康より後

図の左は織田信長・豊臣秀吉の時代までの町割り（上方風）ですが、道路を挟んで町が作られるのが一般的でした。しかし、徳川家康の時代以降（江戸風）では図の右のように、道路に囲まれた四角の部分で町が作られました。大聖寺の京町や本町のようなもっとも古くにできた町は左の図のように道路を挟んで作られていますので、織田信長・豊臣秀吉の時代すなわち前田家が支配する前の溝口秀勝（1584～98 年）や山口宗永（1598～1600 年）がお殿様だった頃に町ができていたと考えられるのです。

また上方風の道路を挟んでつくられた町では、ふつう背戸（家の裏側）に排水溝が作られます。そして大聖寺の京町や本町などの古いお宅では、裏庭の部分に排水溝があった跡がよく見られるそうです。それに上方風の町では台所やトイレは排水溝がある家の奥の方につくられることになりますが、大聖寺の古いお宅では、水回りが家の奥にあることが多いそうです。（江戸風の町では上方風とちがって、排水溝は家の前にあり、台所やトイレは家の前の方にあります。）

（2）本当はお城を作りたかった3代藩主・前田利直

大聖寺藩3代藩主は前田利直（としなお）といいます。1672（寛文 12）年に第 2 代藩主利明の長男として江戸に生まれました。

1684 年に5代将軍徳川綱吉に御目見得して以降、寵愛を受け、藩主になる前年の 1691（元禄4）年には、外様大名の立場にもかかわらず奥詰（おくづめ）に任じられ、待遇も譜代大名と同格に扱われました。奥詰は譜代大名と同格ですから、奥詰の中には、肥前平戸藩の松浦氏が寺社奉行をつとめたように、外様大名であっても幕府の要職につくことができたようです。ですから、利直は「老中になりたい」と夢見たことから、本藩の加賀藩がやきもきしたという話もあります。

←1709 年に利直の別邸としてつくられた長流亭

利直は綱吉の寵愛を受けていたことから、ほとんど大聖寺に戻らず、定府大名として江戸にいたそうです。その 3 代藩主利直にはもう一つ夢がありました。それは大聖寺にお城を造ることです。1615 年の一国一城令により、もともと錦城山にあった大聖寺城はとりこわされました。現在、加賀市教育委員会によって大聖寺城の発掘調査が行われていますが、当時の大聖寺を治めていた加賀藩が、江戸幕府の目を気にして徹底的に城の石垣をこわしていた様子がよく分かるそうです。

ですから、利直の頃には、大聖寺藩には藩邸（陣屋）しかありませんでした。同じ金沢前田藩の支藩である富山藩は越中国であるため、城の修復を幕府に認められましたが、大聖寺藩は加賀国の一部にあたるため、城の再建は認められていなかったのです。そこで利直はお城が造れないのならばとばかりに、とても立派な藩邸を建設したといいます。これには江戸幕府もビックリして、「まさかお城を造る気ではないか？」と調査のための役人を派遣するくらいだったそうです。

その時の藩邸の様子を今に残すのが長流亭です。1709(宝永 6 年)に利直の別邸として建てたもので、とても優雅な姿を今に伝えます。

←利直も眠る実性院の大聖寺歴代藩主の墓

利直が藩主だった頃は、家臣団の派閥抗争や江戸藩邸の焼失などもあって、藩財政がとても苦しくなりました。また晩年の 1706 年、綱吉の死去にともない奥詰を解任された上、弟の利昌が大和柳本藩主織田秀親を刺殺して大聖寺新田藩が改易となるなど、不幸が続きました。そのような中、利直は 1711（宝永 7）年に 39 歳で亡くなりました。

（3）生類憐みの令と「大聖寺藩」

1685（貞享2）年、江戸幕府第5代将軍徳川綱吉は「生き物を大事にするように」という意味から「生類憐みの令」を発しました。一説には、世継ぎに恵まれなかった綱吉が、僧侶から“子が欲しければ殺生を慎め”と言われたのがキッカケだとか、特に犬が大切にされたのは綱吉の干支が戌（いぬ）だったからだ、ともいわれています。

最初は「犬・猫・牛・馬を大事にせよ」というようなの4つの条文から始まった「生類憐みの令」でしたが、その内容は徐々にエスカレートしました。「傷ついた犬を放置していたら町中の落ち度とする」「犬同士のかみ合いをふせぐ喧嘩水の用意せよ」「傷ついた犬は犬医者に治療させよ」など。

そのような中、将軍綱吉に寵愛されていた大聖寺藩3代藩主前田利直に対して、1695（元禄8）年12月6日、「江戸の角筈（つのはず、現在の西新宿）に犬小屋を普請するのを手伝うように」という命令が下されました。そしてその普請の内容は2万坪の土地に、長さ40間(72.7m)の犬舎を次々と建て、江戸で増え続けていた犬の数がこれ以上増えないように、江戸中の牝犬を残らず収容するというもので、毎日五、六千人の人夫が動員されました。その結果、この土地にはなんと8万2千匹もの牝犬が集められ、犬1匹につき、1日に米2合と銀2分が支給されたといいます。 この工事により大聖寺藩が負担させられた金額は6986両にものぼりました。（幕府は1年に9万8千両以上を支出したともいいます。）

仮にこの時代の１両を現在の約１０万円として計算すると、大聖寺藩は６億９８６０万円を支出したことになります。 このために、大聖寺藩は焼失した江戸屋敷を新築したかったのですが、資金が不足し、本家の加賀藩から多額の借金をすることになってしまいました。

このとき大聖寺藩が造営した犬小屋を「四谷犬小屋」といいますが、２年で西中野に移されます。なぜかというと、幕府は西中野にさらに大きな 16 万坪規模の「お犬さま御殿」をつくったからです。総工費は 20 万両（約 200 億円）。東京ドーム 20 個分というスケールだったようです。そこには 25 坪の御犬小屋が 290 棟、7坪半の日避け場が 295 棟、犬の養育所が 460 箇所もあったそうです。「お手伝い普請」は「参勤交代」とならんで、大聖寺藩にとってとても大きな負担でした。

（4）かつて水害の町だった大聖寺

大聖寺はかつて「水害の町」だったそうです。毎年、梅雨の時期には必ずといっていいほど、大聖寺には洪水があって人びとを困らせていたそうです。

藩政時代の 230 年の間にも 100 回以上の洪水の記録が残っているそうですし、近年でも 1934（昭和9）年、1953（昭和 28）年、1958（昭和 33）年、1981（昭和 56）年に大変な洪水被害があったといいます。ですから、大聖寺の年配の皆さんは、水害への対策を常に心がけて、家を造るのに床を高くしたり、床板に釘を打たずすぐに畳を上げて、床板をめくることができるようにしたり、工夫されているそうです。大聖寺の家では今でも畳をあげる「台」を常備しているお宅が多いそうです。

大聖寺にある法華坊町は、江戸時代の 1673（延宝元）年までは、大聖寺川右岸に位置し、上福田村の一部だったそうです。しかし、大聖寺藩2代藩主前田利明のとき、たび重なる氾濫のため犀ヶ淵（さいがふち）とよばれる危険な場所を改修する工事に乗り出し、現在荒町に

ある水守神社の地から福田橋にかけて、まっすぐに新しい流路を掘って、それまでの河道を埋めたのだそうです。法華坊というのは、新しい川の流れとそれまでの川の流れの間に残った半月形の地だったのです。（今でも法華坊の老人福祉センターの横に旧河道の跡が伺える溝が残っています。）上福田では、この地を長らく「中村」と呼び、畑地として耕作していたといいます。

（4）大聖寺藩・三河吉田橋のお手伝い普請

大聖寺藩は4代藩主利章が治めていた 1751（宝暦元）年、幕府により三河吉田藩（現在の愛知県豊橋市）の東海道に架かる吉田橋の架け替えを命じられました。三河吉田藩は、譜代大名が歴代藩主を務め、吉田藩に入部することが、幕閣になるための登竜門といわれた藩です。

大聖寺藩は 1752（宝暦2）年3月3日に工事を着工し、5月に橋を完成させました。5月 13 日には渡り初めが関係者を集めて盛大に行われたといいます。ところが、その年の秋頃になると、できたばかりの新しい橋が曲がるという事態が起きてしまいます。このような事態が起こった背景には当時の江戸幕府が財政難であったことから、主要街道に架かる橋を監督する幕府の作事方（今の国土交通省）と安く工事を行いたい勘定方（今の財務省）の幕吏が対立していたことがあるといいます。

とばっちりを受けたのが大聖寺藩です。橋の架け替えのために、御用金2万 3650 両（現在の2億 4000 万円近く）を負担したあげく、工事のやり直しを命じられたのです。大聖寺藩の工事担当者は抗議のため、みんなの前で切腹したと言われています。そして工事のやり直しには、6カ月の時間と新たに3万両の費用がかかりました。この工事は大聖寺藩にとって、とんでもない赤字をもたらしたのでした。当時の大聖寺藩総奉行であった野口兵部は処分を受け、失意のまま 1755（宝暦5）年に亡くなったそうです。野口兵部の墓は現在、大聖寺鉄砲町の松縁寺にあります。

（5）大聖寺藩は前田利常の軍略から生まれた!!

大聖寺藩ができたのは 1639（寛永 16）年のことです。加賀藩3代藩主・前田利常が小松に隠居したさい、金沢 80 万石を光高に、富山 10 万石を利次に、大聖寺7万石を利治に譲ったの

がはじまりです。利常はいつも徳川家の警戒にさらされながら、優れた政治を行い、「政治は一加賀、二土佐」と讃えられるほどすばらしい体制を築いた人です。

ところで皆さん、大聖寺藩ができてから 1660 年までの間、大聖寺藩には今の富山・新潟県境に飛び地があったことをご存じですか？実は現在の富山県朝日町に、大聖寺藩4300石分（越中国新川郡内 9 村）の飛び地が置かれていました（富山藩の飛び地もありました）。このような飛び地がわざわざ富山・新潟県境にあった背景には、徳川家に警戒されていた前田利常の巧みな軍略があったのだそうです。

江戸時代は、武士は必ず城下町に集住しなければいけませんでした。ということは、加賀藩の武士たちは城下町・金沢一カ所に住むことになっていたわけです。しかしこれでは、加賀 120 万石の大きな所領を防衛するには不都合が生じます。ましてやお隣・越後と越前には、徳川家の親藩松平家が配置されています。

そこで、利常は金沢以外の場所に、武士を配置できるように、富山藩・大聖寺藩の二つを立藩したと思われるのです。富山・大聖寺の二藩をつくれば、越後や越前から敵がやってきたとしても、二藩の藩士たちが事前に食い止めることが可能になります。富山・新潟県境にあった大聖寺藩の飛び地も金沢防衛のための軍略であったろうと考えられるのです。

（6）大聖寺藩主は「忠臣蔵」の吉良上野介と親戚でした!!

みなさん、大聖寺藩初代藩主・利治と2代藩主・利明が、なんとあの「忠臣蔵」で有名な吉良上野介と親戚だったってことをご存じでしたか？

大聖寺藩前田家と佐賀藩鍋島家の間には深い「血の絆」があって、有田焼と九谷焼をつなぐ人やモノ、技術の交流を考える上でとても重要なファクターです。徳川幕府は当初、幕府に対抗する力を持つ外様大名を抑える政策を打ち出しました。改易（領地没収）や減封（領地削減）を強力に行いましたし、一国一城令や参勤交代制度を実施し、外様大名の軍事力や経済力を弱体化させようとしていました。そこで全国の有力な外様大名たちは、まだ戦国時代のなごりが残っていた時代でもあり、「徳川の天下もどう転ぶかわからない」と考え、いざというときに徳川幕府に対抗できるように、さまざまな婚姻関係をもって「対徳川包囲網」を固めていたのです。

当然、加賀藩前田家はその中心だったと思われます。30 万石をもつ米沢藩2代藩主・上杉定勝が、3人の娘のうち、一番目の娘・徳姫を加賀前田家 100 万石の分藩である大聖寺藩初代藩主・前田利治に、二番目の娘・虎姫を 35 万7千石を誇る佐賀藩主・鍋島光茂に、三番

目の娘・亀姫を大聖寺藩2代藩主・前田利明に嫁がせたのはその典型的な例だったと思われます。

しかしその一方、外様大名たちは少しでも徳川幕府ににらまれないようにするための婚姻関係も結んでいました。米沢藩2代藩主・上杉定勝には実はもう一人の娘・富姫がいて、江戸幕府で高家（こうけ）職を勤めるあの吉良上野介に嫁がせていたのです。高家（こうけ）職とは、幕府と朝廷との間の儀礼を取り仕切る要職でした。その上吉良上野介の血筋は曽祖父が徳川家康のいとこ、母が譜代大名きっての名門酒井家の出身というものでした。ですから上杉家にとって、幕府内に強力な縁故をもつ吉良家との婚姻は、相当大きなメリットがあったと思われます。現に米沢藩3代藩主・上杉綱勝が世継ぎがないまま 27 才の若さで急死し、お家断絶の危機にあったとき、吉良上野介の息子が四代目藩主となって事なきをえたそうです。もし上杉家の血縁者が外様大名の前田家や鍋島家にしかいなければ、外様の大藩の子弟を上杉家の当主に迎えることを幕府は認めなかったでしょうから、上杉家はお取り潰しになっていたと思われます。

「忠臣蔵」のお話で、上杉家が吉良邸を守っていたのはこのような縁からだったのです。わたしは大聖寺藩のお殿様が、奥さん同士のつながりであの吉良上野介と親戚の関係にあったとは、歴史ってとってもおもしろいですね!